

O2-043

PCエゴグラム・OKグラム調査からみた、小児看護学実習前における看護学生の特徴

田中 勇気

日本保健医療大学 小児看護学

【目的】

交流分析理論に基づき、看護大学生における実習前の学生の特徴を明らかにする。

【方法】

1. 対象者：東京近郊にある看護大学3年生を対象とした。対象者は110名で、回収数は95名であった。(男性30名、女性65名)を分析対象とした。平均年齢20.7歳(SD=2.14歳)であった。

2. 方法 次の質問紙調査を実施した。

1)PCエゴグラム(Permeability Control Power Egogram)
従来のエゴグラムに、自我状態を適切に切り替えることができる透過性調整力(Permeability Control Power: PC)と、自分を見るときに傾向を示すSelf Reflection(SR)の2つの項目を新たに加えた、より完成度の高いエゴグラムである。

2)OKグラム

OKグラムは、交流分析理論に基づき、基本的構えを測定する。これは、4つの基本的構えである自己肯定、自己否定、他者肯定、他者否定を測定するもので、4つの基本的構えについて10項目ずつ合計40項目で構成される。対象者の基本的構えを評価するために用いる。

3. 分析

統計解析はIBM SPSS 21.0 for Windowsを用いて行った。PCエゴグラムのそれぞれの自我状態が有する特徴とOKグラムの基本的構えとの関連について検討するため、Spearmanの相関分析を用いて解析を行った。有意水準はすべて p 値5%未満とした。

4. 倫理的配慮

本研究は、所属機関の倫理委員会の承認を得て実施を行った。調査対象者には本研究の目的と意義、研究の方法、および個人情報保護に関する事項、研究成果の公開可能性がある事を書面および口頭にて説明した

【結果】

自己肯定において、Permeability Control Power: PC($r=0.505$, $p<0.01$)で正の相関、Adapted Child: AC($r=0.410$, $p<0.01$)で負の相関を認めた。自己否定において、AC($r=0.529$, $p<0.01$)で正の相関、PC($r=0.491$, $p<0.01$)で負の相関を認めた。

【考察】

自己肯定の高さが、透過性調整力を高める働きをすることが示唆された。また、ACの高さが身体症状・不眠・不安と関連しており、自己否定とACで正の相関を認めているため、ACの高い学生に対し援助を行っていく必要性が示唆された。

O2-044

看護師による小児便秘改善への支援

鶴田 恵子、谷 美樹

川井小児科クリニック

【はじめに】

ここ最近便秘でクリニックを訪れる子どもが増えている。便秘は排便時の疼痛を訴える事も多く、慢性になりやすく早期の改善が望まれる。今回、便秘を主訴に来院した乳幼児を対象に便秘になった時期や食・生活習慣などについてのアンケート調査を行った。そして便秘改善に向けてのさまざまな看護支援を実践したので報告する。

【対象と方法】

平成27年9月から平成29年1月末までに便秘を主訴に当クリニックを受診した94例(1歳未満37例、1歳以上10歳未満57例)。保護者にアンケートをとり、便秘の原因や病態の説明、薬物療法の必要性や食生活習慣の指導などを行った。保護者には排便日誌をつけてもらい、看護師は日誌から服薬の確認と排便状態、指導したことが実践できているかを確認。排便コントロールが良好な状態であるかチェックした。

【結果】

「いつから便秘がはじまったか」に対して、1歳未満では「離乳食開始後から」が22名(59%)、1歳以上では「1歳前から便秘だった」のが23名(40%)、「1歳頃から」が18名(32%)と乳児期から便秘が続いていた。「便秘の原因と考えられる要因は何か」に対して、1歳未満では「離乳食の開始」が20名(54%)、1歳以上も「離乳食の開始」が14名(25%)で最多だった。次いで「わからない」も多く、それ以外では「水分不足」「環境の変化」「食事の偏り」「トイレトレーニングの開始」と原因は多岐にわたっていた。「便秘改善のために何かしていることはあるか」は、水分を多くとる、野菜を多くとる、ヨーグルトを毎日食べる、乳児ではマッサージしているなど、家庭では様々な工夫がなされていた。薬物療法として乳児にはマルツエキス、1才以上は酸化マグネシウムを投与した。便秘の食生活習慣の指導として、乳児には食物繊維をとる事、1日の必要水分量をとること、便秘解消のマッサージや体操の方法を指導した。1歳以上には朝食はしっかりとる、朝飯の後にトイレに行く習慣をつける、身体を動かすこと、夜更かししない、便秘に有効な食事をとることなどの指導を行った。4週後の便秘改善度は改善38名(68%)、やや改善16名(29%)、改善なし2名(4%)であった。

【考察】

乳児より便秘が続いている児が多く、早期治療開始と継続が大切である。「排便日誌」を使用することで、生活指導の徹底、治療の継続が出来、多くの乳幼児で排便コントロール良好な状態を保つことが出来るようになった。